

「根締め」

校長 稲葉 守朗

9月14日より、2泊3日で7年生と魚沼自然教に行きました。宿泊した「みどりの学園」は、奥只見ダムの近くにあり、まさに秘境の中の一軒宿です。約60年前に作られた水力発電所は、現在も多くの電気を作り、毎日関東地域にも送電しています。川をせき止め多くの水を蓄えた湖は、人工湖としては日本最大級です。ダムの強度は現在も健在で、しっかりと役割を果たしています。自然教室の初日には、黄金色に輝いた稲の収穫を体験しました。地元の方によると、魚沼地域の水田は、米作りを目的として作られたものですが、「貯水池」としての機能も果たしていて、洪水などの水被害の防止に役立っているそうです。「稲作の後継者がいなくなり水田が機能なくなると、大雨のときの水被害が心配になります。」と話していました。

水は、私たちの日常生活においてとても身近な存在で、水・氷・水蒸気というように3つの姿に変化します。このように柔軟に変化する物質は水以外にないそうです。山から流れ出た清らかな水は、清流となり大地を下り、やがて大河となって海に注ぎます。水は、雨⇒川⇒海⇒雲という循環を繰り返し、豊かな自然環境をつくっています。しかし、ときには許容範囲を超えてしまうことがあります。

9月には、巨大かつ強力な台風14号をはじめ、4つの台風が日本の各地に大きな被害をもたらしました。そして、台風による強風や豪雨は、多くの人の生活する場を奪いました。このような河川の氾濫は、昔から繰り返し起こっているようです。

神奈川県小田原を流れる酒匂川（さかわがわ）の堤防には、その強化と水防工法のための資材として松が植えられています。酒匂川は、暴れ川とも言われ、過去に繰り返し水被害をもたらしてきました。農業を営む二宮金次郎の家族も被害を受けていました。1800年頃の金次郎が13歳の時の話です。金次郎は、子守の手当としてもらった二百文（現在の6500円程度）を、自分の生活費にあてるよりも、みんなの生活を脅かす洪水対策のために役立てようと考え、子守の帰りがけに松の苗木売りから200本を安く買い取り、酒匂川の堤防にその苗木を植えました。堤防は松の根でしっかり固められて、洪水でも崩れなくなると考えたのです。古来の土木造作では、「根締め（ねじめ）」という、木の根により石垣や土手の強度を高める方法がとられてきました。金次郎は、そのことを知っていたのでしょうか。干ばつで苦しむアフガニスタンで、用水路づくりに尽力した中村 哲さん（医師）もこの技法を活用し、「蛇籠（じゃかご）」（鉄線で編んだ籠に玉石などを詰めたもの）が積まれた用水路の周りに柳の木を植えました。未来を見据えた中村さんの言葉、「鉄線で編んだ蛇籠は、いずれ腐食し切れてしまうだろう。しかし、そのときには、柳の根がしっかり蛇籠の石に絡みつき強度を保ってくれるはずだ。」がとても印象的でした。

中国の古典の言葉には、「一年計画ならば穀物を植えるのがいい。十年計画ならば樹木を植えるのがいい。終身計画ならば人を植える（育てる）に及ぶものがない」とあります。この言葉からも、人を育成することの大切さが分かります。学校は、まさに教え育み人づくりをする場です。人のため、社会のため、世界のために役立つとうとする心をもつ人材を育成できるよう、ご家庭や地域と協力して、教育活動を進めていきたいと思ひます。